View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

【審査論文】

中国社会の二重構造と「顔」論的アプローチ

李　明伍

The Dual Structure of Chinese Society and 'Face'-Based Approach

Mingwu,Li

1　問題の所在

中国社会は複雑な様相を呈しており、将来への展望は難しい。これは多くの中国研究者が指摘するところである。主に社会階層の視点から中国社会を研究している園田［2008b］は、第一線で活躍している中国の社会学者に対してインタビューを行っているが、ほぼ全員が将来への展望の難しさを示唆している[1]。また、加々美［2007］によれば、「日本の現代中国研究の専門家たちは例外なく、現代中国の現実を客観的に正しく認識することの困難、あるいは将来予測の困難を指摘」［p. 3］している。その原因は複数考えられるが、なかでも中国社会の極端な二重構造と制度論的アプローチへの偏重が重要のように思われる。

中国社会の二重構造は分析的には主に２つの側面から観察される。１つは社会体制ないし制度の側面であり、いまひとつは行動様式の側面である。中国では1980年代からの本格的な改革開放政策により、市場経済化が急速に進んでいるが、しかし依然として政治の面では一党独裁が続いており、社会主義というスローガンも掲げられたままである。これは当然ながら社会を不透明なものにし、様々な制度の弱体化ないし無力化をもたらす。一例として中国で常に問題視されている「灰色収入」を挙げることができるが、これは首相の政府活動報告にも登場するほど重大な問題となっており[2]、中国経済改革研究基金会（CRF）の調査によれば、このような公式統計に反映されない収入がGDPの３割に相当する額に達している[3]。このような事実は、公式制度や公式データのみに頼って中国社会の構造や変動を把握することは難しいということを物語る。

行動様式の側面に関しては、演技的特徴をとりあげることができる。中国社会における面子は演技的性格を強く有するものであるが、その重要性は英語や日本語への影響からも窺い知ることができる[4]。中国国民性論の古典 *Chinese Characteristics*（1894）[5]において、著者のA. H.スミスは中国生活の体験をもとに面子現象をとりあげ、中国人の日常生活における演技性について指摘しているが、この主張はその後の欧米や中国における中国研究、さらには社会研究一般に大きな影響を及ぼすこととなる。後にアメリカ社会学会長となるゴフマンもその影響を強く受けており、社会学理論に大きく貢献している彼のドラマトゥルギー論も、その影響を受けているように思われる[6]。

ここでイメージされている演技とは、欲望の地点と想定されるところから大きくかけ離れたところにおいて行われる規範的行為のことと思われるが、しかし人間の文化的拘束性を考えるならばこれを素朴に「本心ｖｓ偽装」という図式で捉えるのは適切ではない。但し表現のパターンの比較としてその相対的距離は取り上げられよう。中国社会における演技の場合は、確かに動機（利己的・利他的）に関係なく欲望の地点からの距離は比較的大きいことが認識される。従って、中国社会におけるいわゆる正当な行動規範を理

和洋女子大学　人間・社会学系社会科学研究室

解しただけでは、中国人の行動を理解したことにはならない。中国社会の日常生活においては、常にいわゆる正当な行動規範とともに、潜在的で現実的な行動準則が存在するのである。

このような事情からみても、制度論的なアプローチのみでは中国社会の実態把握は困難であることが分かる。従って、他の視角によるアプローチも必要となってくる。そこで浮上するのが「顔」論的アプローチである[7]。ここにおける「顔」（以下顔と記す）はもちろん社会的概念である。

そもそも人間社会における顔とは何か。形式合理性の支配する現代社会においては、顔は単なる個体識別のためのしるしとして規定される傾向を強く有する。しかし時空を考慮に入れれば、顔は無限の表情（表現）をもつと言えるのであり、実際具体的な生活の場面では、われわれは時として自覚のレベルにおいても相手の意外な一面（顔）に触れて感動し、そして、それによって人生観を含む価値観までも変えたりすることがある。つまり顔は支配的ルールによって「管理されるモノ」と見なされがちだが、しかし自らも意味（ルール）を生成する主体であることには違いない。「おもて（面）」という特殊文化現象から顔の普遍的性格への接近を試みる哲学者の坂部［2009＝1976］によれば、顔は意味世界の重心である[8]。つまり混沌の状態から「おのれ」（我）と「おのれ」（汝）の相互現前によって意味が立ち現れるはざまという捉え方であるが、筆者の前述の認識はこれと基本的に一致する[9]。但し、坂部の議論においては「西ヨーロッパ的なロゴスの対自化」［坂部恵・山崎賞選考委員会,1978,p.147］という「使命」もあって、自他分離の可能性の示唆はあるものの、前段階の「混沌」や「おのれ・手前」といういわゆる「原人称」が強調され過ぎているなど、人間の言語拘束性が些か軽視されており[10]、この点については、筆者は違った認識をもつ。要するに、顔は他者を前提としており、その点で意味の発生源と言えるのであり、またその意味によって社会的行動が回路づけられると言える。意味世界の重心という表現はこのような視点においても成り立つ。但し既存社会秩序がこの全過程に強く影響するということは言うまでもない。この認識をさらに敷衍して言えば、顔はその人の全体の表現であるだけでなく、他者・社会との関係の現れでもある。従って、言説を含め顔現象を考察することにより、その人の人格と社会関係に接近することができ、ひいては社会構造の理解につながる。このような考えのもと、筆者は顔論的アプローチを提唱することとなった。ここにおける顔論的アプローチは、このように基本的には顔現象を通して社会を見ようとする方法論である。この方法論の特徴としては、顔の性格からも分かるように、非人格的制度ならぬ人格的コミュニケーションから出発すること、そしてイデオロギー的（制度的）価値より、人間のより自然な心情に着眼点をおくこと、などが挙げられる。

筆者はかつて顔の問題系に関して学会で次のように述べたことがある：「社会学から『顔』を捉えた場合、少なくとも以下の問題系が確認できる。（１）アイデンティティの問題系。この中には、尊厳、名誉、名声、などの問題が含まれる。自己実現やいわゆる精神的欲求などもこの問題系に含まれよう。（２）コミュニケーションの問題系。『顔』を媒介とした社交儀礼、自己呈示、ゴフマン流の演技論、などの問題群をはじめ、象徴レヴェルのコミュニケーション、所謂社会的欲求関連問題がこの中に含まれる。（３）社会的交換の問題系。（中国社会に関して言えば）『顔』が前提となっている、『関係』、『関係網』、『人情』などの現象のうち、とりわけいわゆる経済的欲求に関する問題群などがこの中に含まれる」［李明伍,2009］。要するに、具体的には、このような研究を通して中国社会の本質に接近しようとする試みが中国社会への顔論的アプローチなのである。

本稿では、既存研究の中から顔論的アプローチに属すると思われるものについて、その成果と問題点を整理し、顔論的アプローチの方向性について考えることとする。

２　人情的信頼と利的行為

今日の中国では、再分配主導が否定され、市場交換メカニズムが導入されたが、それが十全に機能しているとは言えない。そうなると、互酬の存在感が増すこととなる[11]。互酬的行為への主なアプローチは、社会交換論およびその流れを汲む社会資本論からのアプローチと、本土化研究論としての「人情」論的アプローチとに、２分される。互酬自体基本的に顔を前提としており、従ってそれへのアプローチは広い意味で顔論的アプローチとも言える。

共産党政権樹立後、互酬的行為に対する本格的な研究は、「関係」現象に起因する「関係」研究から始まる。とりわけ文化大革命後期、経済停滞により物不足が深刻となり、人々は生活に必要なものを社会各界に張り巡らされた人脈即ち「関係」を通して手に入れようとしていた。このことに関連して中国社会の人間関係が、伝統的な旧中国の「朋友」的関係から、共産党政権樹立後「同志」的関係に変わり、それがさらに文化大革命後期から用具的な「関係」的関係へと変わったという指摘［孫立平,1996］もあるが、「朋友」的な関係と「同志」的な関係が理想化されすぎている嫌いはあるものの、文革後期の状況が的確に捉えられているように思われる。また喬健［1988］は、当時の「関係」構築の方法を６つにまとめている（①「襲」：既存関係を受け継ぐ、②「認」：積極的に共通の関係基礎（同郷等）を確認する、③「拉」（引き込む）：既存関係が遠い場合、あるいは既存関係が存在しない場合、何らかの手法で近しい関係へと発展させる、④鉆（入り込む）：あらゆる手段を講じて権力者に接近する、⑤套：取り入る　⑥聯：関係ネットワークを拡大する）が、ここからも当時の状況が生々しく伝わる。これらの研究も含め初期の「関係」研究は、社会風潮への批判という色合いが濃く、相当バイアスがかかったものだった。

その後現われた社会関係資本論からのアプローチは、アメリカの研究者林南［ナン・リン,2008］に負うところが大きい。林南は「関係」を含むインフォーマルな社会関係を社会関係資本として捉え、それとフォーマルな社会的地位（「制度的資本」）との相関を研究しているが、そのような手法は中国の研究者にも大きな影響を及ぼしている。たとえば、張文宏［2006］は2000年の北京市民に対する調査を通して、社会階層と社会ネットワークとの関係を考察しているが、その中で、専門職や行政管理職の階層が一般労働者階層より、広範囲で、価値の高いネットワーク資源を有している、ということを明らかにしている。紙幅の関係上他の関連研究は割愛するが、全体的に社会資本論からのアプローチでは、インフォーマルな関係が社会的交換において重要な意味をもつことは指摘されているが、それがどのようなメカニズムで交換を媒介するのかについては、議論が深められていない。

この媒介に着目したのは人情論的アプローチである。中国社会における「人情」（renqing）（以下人情と記す）は西欧的合理性とは対立するものである［林語堂,1992；梁漱溟,1935］が、しかし西洋社会における友情や感情とも異なり、的確に英語に訳すことが難しい概念である［Fried,Morton H.,1953; Jacobs,B.J.,1979］とされてきた。それくらい欧米的枠組みでは捉えづらい概念であるが、既存研究及び言説分析を踏まえて言えば、人情は基本的に、相手を意識しない自然な感情、そして同情、さらに個々人の具体的な感情からはある程度遊離している世情などから構成された複合体であり、しかも同情[12]ないし世情への強い指向性をもつものである［李明伍,1997b］。要するに、自然な感情をベースとしながらもそこから離れようとする傾向をもち、そしてとりわけ行動と結びついた時社会規範的性格を強く有する、といった特徴をもつものとして捉えることができる。この社会規範性と媒介性とが深く関わっていることは言うまでもない。それが行為のレヴェルでは次のような人情的行為として現われる。同情から、あるいは何らかの義務感から行動によって相手に示される好意的配慮、これが人情的行為である。そしてこのような配慮のもとで行われる社会的交換が人情的交換である。

人情に関するこれまでの研究は主に、心理メカニズムに重点がおかれたもの、文化規制に重点がおかれたもの、そして社会メカニズムに重点がおかれたものなどに大別される。心理メカニズムに重点がおかれた研究の代表的なものとして黄光国の「人情－面子」モデルが挙げられる。彼［黄光国、2004］はまず社会的交換行為の３つの準則—公平準則（equity rule）、均等準則（equality rule）、需要準則（need rule）－を確認し、その上で公平準則に従う行為を用具的（instrumental）行為、需要準則に従う行為を表出的（expressive）行為、そして当事者同士の睦まじさや結束が強調される際に選択されるとされる均等準則に従う行為を、用具的性格と表出的性格とを兼ね備えている人情的行為として、位置付けている。さらに、この人情的行為においては、面子工夫（face-work）によって形成される面子が相手の行為を誘導するという意味で、重要な意味をもつとされる。

一方、文化規制に重点がおかれているものとしては、翟学偉の研究［1993;2004］が重要な位置を占めている。彼によれば、中国社会は家族主義といわれるほど家族文化が根強く、従って中国人の行為の基本様式は家族的行為の延長線上にある人情的行為であり、この行為は儒教の「人倫」思想などにより正当化されている［1993］。さらに、この人情的行為は礼によって一定の形式化が図られ、「情理」混合の行為へと帰結するとされる［2004］。

筆者はかつて社会メカニズムの視点から人情的行為について分析を行った［李明伍,1997b］。筆者はまず人情的行為が、再分配や（市場）交換メカニズムの不備による互酬的行為の一種であると指摘した上で、その社会的交換の媒介として、多くの社会に見られる一般的慣習として捉えることも難しく、そして日本社会に顕著な義理とも性格を異にする人情が選択されるようになったのはなぜか、という問いを立て、主に日本社会との比較を通して、ネットワーク化傾向の社会的性格によるものであるという結論を導き出した。

これらの研究では人情的交換行為の要因として、均等原則による心理バランス、家族主義的文化の影響力、ネットワーク化という社会構造的要請、などが指摘され、中国社会における人情的交換行為の必然性がある程度明らかにされた。これらの人情的交換行為の要因は、そのまま信頼の基盤として捉えることもできよう。ここでは近年盛んになっている信頼問題の議論を参考に、人情の信頼的基盤について考えることとする。

そもそも信頼は社会的交換の前提と言える。中国社会の信頼に関する議論においては、マックス・ウェーバーの「呪縛」が依然として根強く残存しているように思われる。マックス・ウェーバーは血縁的な家族主義が中国社会における一般信頼の発達を妨げているという認識を示しているが［Weber,M.,1971］、近年の信頼研究に大きな影響を及ぼしているフクヤマ［1996;2000］も、同じ主張を繰り返している。彼はマックス・ウェーバーと同じ論法で、中国を始めとする、家族主義の根強い国や地域を低信頼社会として位置付けている。しかしこのような見方を覆す研究［彭泗清,1999;李偉民・梁玉成,2002］が複数あることは今さら言うまでもない。同じく信頼研究に大きな影響を及ぼしている山岸［1998］においてもこの考え方が踏襲されているが、ただしフクヤマの場合、日本は高信頼社会に位置付けられているのに対し、山岸においては、信頼社会とは区別される安心社会に位置付けられている。集団へのコミットメント（具体的には特定の相手とだけ関係を取り結ぶこと）による安心を一般的他者への信頼と区別しているわけであるが、これらの議論からも分かるように、信頼に対しては様々な見方がありうるし、一般的信頼についても、定義はそれほど簡単なものではない。

ここではまず定義の整理を行い、それからそれと人情的交換行為との関係について考察を進めることとする。信頼の定義について、フクヤマは「コミュニティーの成員たちが共有する規範に基づいて規則を守

り、誠実に、そして協力的に振る舞うということについて、コミュニティー内部に生じる期待である」［フクヤマ,1996,p.63］と述べ、一方、山岸は「『信頼（trust）』は、相手が自分を搾取する意図をもっていないという期待の中で、相手の人格や相手が自分に対してもつ感情についての評価にもとづく部分」［山岸、1998,p.39］であり、具体的には、「社会的不確実性が存在しているにもかかわらず、相手の（自分に対する感情までも含めた意味での）人間性のゆえに、相手が自分に対してそんなひどいことはしないだろうと考えることである」［山岸,1998,p.40］と述べている[13]。これらの定義をさらに抽象化したものとしてルーマンの定義（「信頼とは、最も広い意味では、自分が抱いている諸々の［他者あるいは社会への］期待を当てにすること」［Luhmann,N. ,1990］,p. 1 ）を当てることができる。このような抽象度の高い定義により、既存の様々な信頼現象を共通の基準で分析することができる。例えばフクヤマの場合は、期待の原因が慣習などのコミュニティの規制と理解されるし、山岸の場合は、期待の理由が相手の人格や自分との関係に関する認識と理解される。そしてより重要なのは、信頼の重層構造の理解につながるということである。

従来の信頼論は、どちらかといえば信頼の一部の理由・原因が強調されすぎているように思われる。王紹光・劉欣［2002］を参考にすれば、慣習や伝統などからなる文化を強調する説［フクヤマ,1996］、生まれ育った環境を強調する説［Erickson,Erik H.,1963］、合理的選択、判断能力を強調する説［Colman,J. S.,2004;2006;山岸,1998］、社会制度（民主主義制度など）を強調する説（民主制度でないと家族や親友以外への信頼は発展しないと主張するレヴィ［Levi,1996］など）、裏切られた場合に受けるダメージの度合いを強調する所謂「新合理的選択」説［王紹光・劉欣,2002］などが挙げられよう。要するに、信頼は複数の要因によるものであり、従って重層構造をなしていると認識されるべきである。このような視点から、人情的交換行為の信頼的基盤として前述の人情的交換行為の要因を措定することができる。この他に、「報恩」、「報讐」（復讐）からなる「報」の慣行なども基盤として挙げられる。これらの基盤による信頼を人情的信頼と表現しておこう。このような複数の信頼的基盤に支えられた人情的交換は、中国社会を分析する上で無視できない存在と言えよう。

3　ネットワーク化指向と関係圏

中国における近代的市民社会の可能性、ひいては社会統合のあり方などの問題は、言うまでもなく中国研究の大きなテーマであるが、既存研究では制度と階層の分析によるアプローチが目立つ。これらの研究はそれなりに有効性をもち、ある程度中国社会の実態を明らかにしているが、しかし、そこにおける展望とは違った方向への社会の展開も確認される。一方これらとは異質のアプローチとして、人間関係、ないし社会ネットワークの研究があるが、後者は顔論的アプローチと接点をもつ。ここでは、まず階層研究の問題点を指摘し、その上で人間関係論、社会ネットワーク研究の展開について見ていくこととする。

周知のように、計画経済期の中国においては、階級闘争が叫ばれる中、建前上は大多数が人民に属する平等社会とされていたが、実際は基本的に幹部、労働者、農民という身分からなる社会だった。李強［2008］はさらに詳しい分析を行い、当時は実質的に、専業技術幹部と行政幹部の間の政治身分障壁、工人（労働者）と幹部の間の档案身分障壁[14]、工人と農民の間の戸籍身分障壁などによって社会が分断されていたと指摘する。改革開放後、市場経済化に伴いこれらの障壁は弱体化し（具体的には、戸籍移動がなくても都会での就労が可能となり｛「戸籍制度の突破」｝、行政階級制に基づく企業等組織のランク付け制度の見直し｛「官本位制の変化」｝、「人材交流センター」等を通して自由に就職できるようになり｛「档案身分の突破」｝、「物権法」等私的所有に関する法律が徐々に整備される｛「所有権強化」｝［李強,2008］につれて）、階層

の再編が行われるようになった。このような変化により、関心は中間層およびそれをベースとする市民社会の出現に集まるようになった。

このような背景のもとで盛んになった階層研究は、ある程度成果をあげているように思われる。ただ、研究結果には多くの問題点が確認される。ここでは、中間層の厚みのずれ、断絶構造と社会的安定の不思議な結合、市民社会への展望の困難さ、など３つ取り上げておく。まず、研究者によって中間層の厚みに大きなずれがみられる点について。中国社会科学院「当代中国社会階層構造研究」グループによる調査では「玉ねぎ」型の階層構造が指摘されているが［陸学芸主編,2004］、同時期李強［2005］が第五回人口調査のデータをもとに行った階層分析では、「逆丁字」型の階層構造が指摘されている。これは主に階層の指標の違いによるもので、所得を中心とした経済的指標に重点をおくのか、あるいは教育、さらには権力的地位をも重視するのか、などによって当然中間層の範囲も違ってくる。

次に、断絶構造と社会的安定の結合について。孫立平［2004;2006］によれば、中国社会は、1980年代の資源拡散から1990年代の資源再集中の過程で、貧富の格差が広がり、農民、農民工（出稼ぎ労働者）、一時帰休者、失業者を主体とする底辺階層が形成し、社会構造は「断裂」（断絶）の様相を呈している。「体制外」（民間）勢力は発展しているものの、体制側は依然として、多くの市場要素、例えば資本、土地、労働力配置権などを掌握しており、企業と密接な関係を保持している。同時に、社会組織、社会事業に対しても強大な影響力を持つ。一方、農民、農民工、レイオフ状況にある労働者などは体制外に置き去りにされる、といった「断裂」社会の様相を呈している。これにより、90年代から権力・経済資源障壁（社会上層特に党政幹部階層は社会移動の面で、ますます閉鎖性、排他性を呈するようになり、社会的上昇は相当難しくなっていること）、文化資源障壁（下層の文化資源獲得がますます困難になり、ブルーカラーが再生産されるようになっていること）、就職機会の障壁（下層は権力資源、経済資源、文化資源、関係資源等の欠乏により就職機会の剥奪が常態化していること）［曽鵬,2008］などが顕著になり、階層が固定化しつつあるという指摘も見られる。このような階層間の境界の形成は、さらには、階層毎のライフスタイルや階層アイデンティティの定着化につながっている[15]［李強,2008］。

このような状況下で貧富の格差が広がり、ジニ係数が危険水域に達しているが[16]、一方、このような格差は社会においてある程度容認されており［李強,2008］、社会的安定が保たれている。その原因について「砕片化」（分断化）［李強,2008］が有力視されている。それによると、中国の今日の収入構成、給与体系、福利体系は複雑であり、とりわけ戸籍身分集団（農村戸籍と都市戸籍）の間や体制の異なる集団（私営企業、外資系企業、国有企業など）の間ではそれが顕著である。そして各階層にはこのような性格の違う集団の成員が分散しており、従って、例えば下層の場合、経済的な状況は同じでもそれぞれ異なる制度によって利益が確保される形でそれぞれの利害関心が「砕片化」されているので、下層としての共通の利害関係が生まれ難くなっている。このことが、貧富格差が大きいにもかかわらず、社会に不穏があまり見られない状況をもたらしている。これは重要な指摘であるが、社会的ネットワークに支えられている側面なども考慮されなければならない。

三番目に市民社会への展望の困難さについて。市民社会や民主化などの表現は中国では自由度の高いものではない。そもそも階層分類自体厳しい統制を受けてきた。従って中国国内の研究では、欧米型の民主化をも意味する市民社会の実現可能性について直接議論されることは殆どなく、主に欧米や日本の中国研究者の間でこのテーマがとりあげられてきた。それらの研究では、中間層が成長しており、それが民主化を推進し、体制崩壊につながるという展望が少なからず見られ［園田,2008］、自営業者、外資系ホワイトカラー、国有系ホワイトカラーなどからなる中間層は国家から相対的に自立しており、市場経済の進展

とともに徐々に市民社会が成熟していく可能性がある［園田,2001］という指摘も見られる一方、それに対する反論も多く見られる。中でも経済の発展によって成長する中国の中間層が、アメリカ型民主主義を目指すと考えるのは「スターバックス神話」のようなもので、幻想に過ぎない［ジェームズ・マン,2007］という議論は一時期話題となった。もちろん日本でも反論［園田,2008］が見られる。このような混乱は、基本的には階層指標によって分けられた集団が共通の態度・行動をとるとする先入観が過度に持ち込まれていることによるもののように思われる。

このように、階層研究は限界をもつ。その限界を乗り越える上で、社会ネットワーク論、更には顔論からのアプローチが重要となってくる。

前述通り、李強［2008］は階層においてはフォーマル集団によって利害関係が細かく分断され（「砕片化」）、階層利益が主張され難くなっているという認識を示しているが、それとは逆にインフォーマルなつながりによって階層の利益が図られているという主張もある。曽鵬［2008］によれば、改革開放の初期においては、市場経済化によって政治権力が弱体化するという「市場転換論」もあったが、しかし現状は権力壟断体制と市場メカニズムの併存状態であり、経済資本の拡大は、政治エリートの保護の下で行われ、政治エリートの権力の商品化もまた経済エリートを通して実現されるという構図が出来上がり、さらに、このような体制の正当性を狙って、知識エリートの懐柔も行われるなど、政治、経済、文化の３エリートの同盟が成り立っている。そしてこの同盟は、あたかも強力なポンプのように、社会低層から資源を上層へ汲み上げ、社会的弱者の利益と権利を剥奪していると指摘されている。もちろんこの同盟はインフォーマルなレベルにおいて形成されるものであり、その過程においてはインフォーマルな人間関係が重要な役割を果たしている。

このような認識の下で、中国社会におけるインフォーマルな人間関係の研究が盛んに行われるようになった。ここでは、その主な主張と、問題点について見ていくこととする。インフォーマルな関係のかたちについての議論は、非常に混乱しているので、ここでは人間関係のあり方を単純化した図式を使って説明することとする（図１参照）。

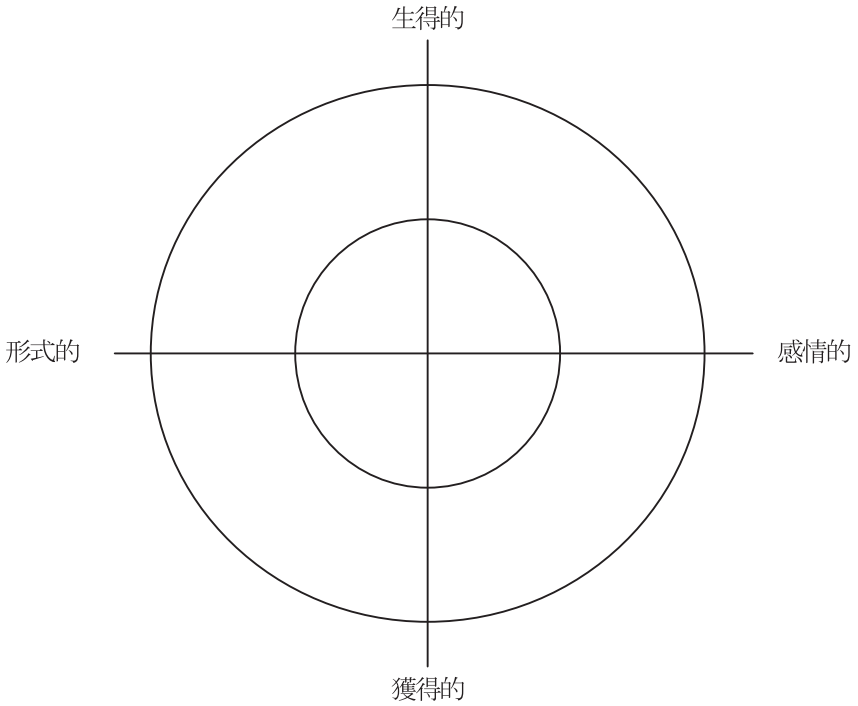

図１　社会関係の類型と「関係圏」　出典：筆者作成

筆者［2005］のかつてのまとめを踏まえて言えば、社会関係は基本的に生得的かそれとも獲得的か、そして感情的かそれとも形式的か、という２つの指標によって分類することができる。生得的なものの典型は血縁と言えよう。獲得的なものとしては、合意によるものが一般的といえる。感情的なつながりは、個別的なものであり、手段化とは無縁という意味で目的的である。形式的なつながりは慣習、法などによる一般化によってもたらされるものであり、それはまた手段的見地によるものであると言えよう。一般的にいって、生得的且つ感情的なつながりの典型は親子関係であり、獲得的且つ感情的なつながりの典型は親友関係であると言える。また、獲得的且つ形式的なつながりの典型は個人的付き合いの全くない同僚関係が典型的であり、生得的且つ形式的なつながりの典型は、殆ど付き合いのない親類と言えよう。

インフォーマルな人間関係に関する議論は、主に血縁重視の傾向をもつものと感情重視の傾向をもつものとに分けられる。ただし、この両者は対応する部分があることは言うまでもない。つまり、血縁が濃いほど感情の度合いが高くなるという主張は共通して見られる。主要議論についてみてみよう。

現代中国の社会学・人類学の第一人者といわれる費孝通の代表的な学術概念に「差序格局」（格局とは構図の意。以下差序格局と記す）という社会関係を捉えたものがあるが、これについては多くの研究者が肯定的に評価している。費孝通はこの概念について厳密な定義をせず、比喩的に使っている。彼によれば、中国人における人間関係は、あたかも石ころを水の中に投げ込んだときにできる無数の波紋のように広がっており、このような遠近の関係構図が差序格局と表現されるものである［費孝通,1998］。要するに、中国社会の人々は他者に対して一様に接するのではなく、親疎の程度に応じて異なった対応をするのであり、それが社会関係として定着していると言うのである。ここにおける親疎は生得 – 獲得の軸のものなのか、それとも感情 – 形式の軸のものなのかは、本人がはっきりしていないが、彼が血縁を重視していることから、血縁レベルに重きがおかれているとは言える。図１でいうと、生得的関係から獲得的関係へと、重要性の順位が広がっている局面として捉えられているということになる。前でも若干触れたが、面子などを媒介としたインフォーマルな社会交換研究の第一人者とも言われる黄光国は、この差序格局説の影響のもと、表出的（感情的）な関係、混合的な関係、用具的な関係という、三つの類型を提示し、そのなかで中国社会において顕著なのが混合的関係であると指摘している。黄光国においても、家族が強調されているが、しかし基本的に感情の面で分けている［黄光国,2004］。図１でいうと、感情的関係と形式的関係（ただし公正なルールを背景にもつ）、及びその間の、両者の要素をある程度含んだ混合的関係が、並んでいるという構図として捉えられているということになる。

費孝通の場合は、論理的に、疎遠な関係になればなるほど、感情だけでなく、公正な態度も薄れていくこととなるが、一方、黄光国の場合は、身内の対極にある人間関係は、公正原理に基づく関係となっている。黄光国のこの点に異論を唱えて注目を浴びているのが楊宜音である。彼女［楊宜音,1999］は、「自己人」（身内）と「外人」（他人）という概念を提示し、「自己人」の対極にある「外人」に対しては、必ずしも公正な態度を取るとは限らないと指摘する。ただし、「外人」から「自己人」になるケースも多く、従ってそのケーススタディの重要性を強調し、自らも精力的に調査を行っている。図１でいうと、感情的な関係と形式的な関係とを対置させており、しかも形式的な関係の場合、公正なルールを想定していない、ということになると思われる。このように、これらの議論にはいろいろ違いはあるものの、結局のところ強調されているのは、血縁的近しさにしろ、感情的親しさにしろ、個別な関係を重視している、ということである。この個別性がまさに中国社会の日常生活の場面で重要な地位を占める「関係　guanxi」の特性なのである。この「関係」には手段的な側面があると同時に、感情的な側面もある。

この「関係」は具体的には、図１の小さな円の中に位置する。つまり、この空間には、生得的関係も含

まれれば、獲得的関係も含まれる。そして感情的な要素と手段的な要素がともに含まれている。「関係」をもつ人々はここに位置付けられるので、「関係圏」と表現することもできよう。上の議論を含め、これまでの関連議論を総合すれば、小さな円が生活世界における基本的な関係であり、小さな円をくりぬいた後の大きな円の部分、つまり純感情×純生得、純感情×純獲得、純形式×純生得、純形式×純獲得、などの関係は、一般的なものではないように思われる。血縁的に最も近く、感情的に深いつながりのある親子関係であっても、そこには義務という形式が内在するのであり、世代間互酬的交換構造を考えるならば［楊宜音,1999,p.50］、この形式と手段性との間は紙一重と言えよう。

ところで、このような「関係圏」においては、没人格的な形式（法や、神権的な強力な共同体の規範など）の色合いが薄いので、個人主義や集団主義とは違う原理が働く。そこには、言うなればつながりの倫理のような原理が働くと言える。そもそも「関係」の機能は何か。それは資源動員の装置であり、同時に一人一人にとっての社会そのものであると言える。資源動員の装置については利的行為のところでの説明からも分かる。ここでは、「関係」が社会それ自体であるということについて見てみよう。

農村地域における親疎に基づく「関係」ネットワークは、かつては協力の機能が強かったが、市場経済化の進展により協力の必要性が減ってきた今日においても「関係」のネットワークが重視されているのは、「関係」そのものが人々にとっては社会そのものだからであると主張する調査報告も見られるが［涂駿,2009］、これは重要な問題提起と言える。類似の指摘は他にも見られる。例えば、劉軍［2006］の調査によれば、農村地域において差序格局的に広がっている「関係」のネットワークは、労働力の貸し借り、小規模助け合い、資金援助などの協力の機能のほかに、感情交流という機能も大きい。また、首藤［2003］の調査でも、親疎の感情に基づく特別な関係は資源や情報の入手に利用されるが、それと同時にその関係の人々と喜怒哀楽を分かち合おうとする生き方そのものにもなっているという事実を確認している。

従って、資源動員の側面のみに着目すると、「関係」維持のコストが効果を上回るような、いわゆる負の機能が指摘されることになる。 劉林平［2006］は調査を通して「関係」利用は費用対効果の面で、交際費用に見合うだけの効果が認められないと指摘し、趙延東［2006］もレイオフ労働者の再就職調査を通して、大部分が「関係」を頼りにしたが、しかし、見つかった仕事は満足するものではなかったとして「関係」の負の機能を強調する[17]。このような指摘は、明らかに「関係」のもっと根源的な側面を見落としているといえよう。中国西部11省（市、自治区）の４万あまりのサンプルのアンケート調査［趙延東,2008］によれば、都市、農村ともに、「関係」ネットワークの規模と心身健康の間には正の相関が見られる。ただし、強い紐帯は精神健康と、そして弱い紐帯は身体健康とそれぞれ関係する。このような事実からも、「関係」が生活世界において重要な意味をもつことが窺われる。

このような「関係圏」は、確かに今のところ社会一般と矛盾する傾向をもつ。とりわけ中国社会におけるこのような傾向を指摘する研究は多い。共産党政権樹立以前の社会に関する共同体論争［旗田,1973］における共同体否定論から前述のフクヤマの信頼論にいたる多くの研究があるが、そもそもこれらの研究はマックス・ウェーバーの中国観の影響を強く受けている。中国研究ではないが、社会学において古典的な議論になっているグラノヴェター［2006＝1973］の「弱い紐帯の強さ」説もこの流れに属する。グラノヴェターは「紐帯の強さとは、ともに過ごす時間量、情緒的な強度、親密さ（秘密を打ち明け合うこと）、助け合いの程度、という４次元を（おそらく線形的に）組み合わせたものである。」［グラノヴェター ,2006,p.125］ とした上で、「弱い紐帯は、疎外を生み出す元凶と見なされることが多かったが…、本稿では、個人が機会を手に入れる上で、またその個人がコミュニティに統合される上で、不可欠のものと見る。一方、強い紐帯は、局所的に凝集した部分を生み出すがゆえに、全体を見渡せば断片化をもたら

していると言えるのである」［同p.147］ と述べ、社会統合の面では、弱い紐帯が機能的にもっと重要な意味をもつと主張する。

ここでいう強い紐帯は中国における「関係」と置き換えて考えることもでき、社会統合に対する強い紐帯の負の機能は、「関係」についてもある程度言えることである。ただ、グラノヴェターも最初の議論から10年ほど経ってから強い紐帯も条件によっては社会統合にプラスの役割を果たすと言って、強い紐帯の見直しを行っている［Granovetter,Mark S,1982］ように、「関係」がどの条件下でも、そしてどの時代においても社会統合を妨げるとは言えないように思われる。

これまで見てきたように、中国社会における人間関係は、顔を媒介とした「関係」のネットワーク化の傾向が強く、従ってフォーマル組織関係や階層関係の分析のみでは、社会の実態把握が困難と言える。

４　「煽る文化」装置としての顔

改革開放以来、中国では社会主義体制の形骸化が進み、共産主義理念への信仰も薄れるなど、人々の信念体系が空洞化の様相を見せる中、新しい信念体系の構築に向けて儒教などの国学が重視されるようになってきたという指摘がある［園田, 2008b］。しかし、これまでの歴史が物語るように、儒教が国教の時も、それは建前的な部分が大きかったのであり、そして社会主義計画経済期においても、共産主義理念が一般の人々の信仰体系となっていたとは言い難い状況だった。従って、中国社会の人々の生活指針、人生観を考察する際、共産主義理念や、儒教の教理と強く結びつけることは避けなければならない。一方、価値観調査の定番は質問紙による意識調査であるが、これも建前と本音の問題を完全にクリアすることはできないなどの限界がある。従って、このような不足を補う上で、顔論的アプローチは有効のように思われる。

顔は自我の象徴であり、また顔と自我を構成する名は不可分と言える。従って、顔の研究は名の研究、自我理想像の研究に通じる。そして言うまでもなく自我理想像の究明は生活指針、人生観の究明へとつながる。この問題を考える上で、バーガーら［1977］の名誉概念の衰退に関する考察は重要な意味をもつ。バーガーらによれば、中世の騎士道精神の影響を強く受けている西欧の名誉概念は、貴族、軍人、法律家、医師などの集団においては身分の表現であり、そこでは、制度化された役割がアイデンティティを構成していたが、近代化によってこのような名誉が衰退し、その残骸の中から（抽象的な）尊厳と人権を発見するに至る。しかしそれにより人々は、リースマンのいうような他者志向型人間となり、またゴフマンのいうような印象操作を通して、自分の存在の意味を自分でつかみとらなければならない孤独な状況に置かれることとなり、構造的にアイデンティティの危機を抱え込むこととなった。

ここで特に注目されるのは、アイデンティティとしての名誉と尊厳の社会的背景であり、そして尊厳が安定したアイデンティティを提供できないとすれば、人々は何によってアイデンティティを確保することとなるのか、という点である。バーガーらは自己疎外でない制度としての名誉への回復を期待しているが、その具体像は必ずしも明らかでない。ここにおける名誉は、特定の集団・社会において尊敬を獲得できる地位（役割）に伴う誉れ、誇りであり、尊厳は万人に平等に与えられた地位のもつ不可侵性（の意識）として理解することもできよう。このような尊厳が安定したアイデンティティをもたらすこともありうるが、多くの場合は、それを起点として更なる自分探しをすることも考えられる。バーガーらの議論の背景には、このような認識があるように思われる。それでは、アイデンティティの源として、閉鎖的な社会による名誉でもなく、また抽象的な尊厳でもないものがあるとすれば、それは何か。さしあたり考えられるのは名声である。名声とは相対的に開かれた社会において獲得された評判のことであるが、その特徴としては、

フォーマルで固定的な地位に伴うものではないので、伸縮性があること、そして、その指標としては、権力的地位、富の所有、才能、人間性など様々なものがあるということが挙げられよう。名誉、尊厳、名声のどれが主にアイデンティティと結びついているか。この問題は、社会の構造と変動を考察する上で重要な指標となる。

これまでの考察から分かるように、中国社会では、基本的に組織的な空間よりも、「関係」ネットワーク的な空間が人々の主な生活の場である。その点から考えると、中国社会において、閉鎖的な集団・社会が前提となる名誉にアイデンティティを求める傾向は強くないはずである。また、基本的に西欧的な個人主義の文化、制度が前提となる尊厳も、中国社会におけるアイデンティティと結びつき難いと言えよう。そうなると、名声と中国社会におけるアイデンティティとの結びつきが最も自然に思われる。実際伝統的中国社会については、ウェーバー［Weber,M., 1971］が既に家産官僚制の定着によって中国の臣下から西欧や日本におけるような名誉が失われたと指摘している。ウェーバーは名誉と忠誠の結合に注目しており、このような結合は西欧の封建制と日本の「家臣」封建制にしか認められないと指摘するのである。この点については、池上［2000］が詳しく論証を行っている。

筆者はかつてウェーバーのこの指摘について、「ウェーバーのいう名誉は、相対化を許さない絶対的な価値の付随する社会的地位（たとえば戦士としての騎士）の誉れ、ないしそれに対する誇りといえるが、それが可能となるためには、なんらかの次元における当該成員の絶対性が社会的に認められていなければならない。というのもそれによってはじめて、当該成員はその絶対性の存する次元において自らの重みを感じる（すなわち誇りをもつ）ことができるからである。…君主の臣下に対する全人格的、すなわち諸次元における支配が原理的に可能な家産官僚制においてはこのような名誉が育まれないことは当然と言えよう。名誉のような絶対性をもつ名が存在しづらい環境は、裏を返せば名声（fame）のような相対性をもつ名が育まれやすい環境でもあると言える」［李明伍,1998,p.112］と解釈を行ったことがある。要するに、封建制が早い時期に終わった伝統中国では、名誉が発達せず、その代わりに名声が顕著だったと言える。このような構図が、現代においても相当程度存続していることが、面子などの言説の分析によって明らかにされている。

前でも触れたように、名、顔、アイデンティティは基本的に同じことであり、従って顔の分析により名の種類、アイデンティティの基盤、ひいては生活態度、人生観などをある程度明らかにすることができる。中国社会では、顔に関する表現として臉と面子とが使用されているが、実質的に重視されているのは面子なので、ここでは面子に関する分析をとりあげる。これまでの関連研究の殆どから、面子の名声的色合いを確認することができる。それらによると面子は「能力的人格」のことであり［胡先縉,2004］、社会的成功によってもたらされる地位、権力、威信のことである［King,Y.C. & Myers,J.T.,1977; 黄光国,2004］。また、面子は集団における地位によるものではなくあくまでその個人に付着するものであり［ Ho, D. Y.F.,1976］、一般的な社会地位と異なる「個人地位」（personal status）である［翟学偉,2005b］という指摘も注目に値する。

このような名声的アイデンティティの追求は、比較を前提とするため、バーガーらが言うように構造的にアイデンティティの危機を抱え込むことになる。このようなメカニズムは大村［1997］のいう「煽る文化」装置と通底する[18]。社会の変動と、この煽る文化装置の関係を究明することは、中国社会論において重要な課題と言えよう。

５　社会変動と顔の再生産－結びに代えて

われわれはこれまでの考察を通して、利的世界においても、義的世界においても、そして名的世界（名［アイデンティティ］の形成、確認を指向する行為を中心とした生活空間）[19]においても、顔が重要な意味をもつことを確認することができた。これらの考察で一貫して見られたのは、個別性を特徴とする顔が一般性的な傾向ももつということだった。例えば人情や関係に現れる顔は、個別的な人格であると同時に、そのポジションが一般性を帯びる傾向ももつのである。このことは、顔が一般的規則性をもつルールであることを意味し、その意味では一種のメディアであるとも言える。

メディア論では、マーシャル・マクルーハンやオングに代表されるコミュニケーション媒介技術の変化に関する議論と、パーソンズや、ルーマンに代表される社会システムの媒介に関する議論とが主な流れをなしている[20]。周知のように、パーソンズの社会システム論においては、貨幣、権力、影響力、価値コミットメントが、それぞれサブシステムのシンボリック・メディアとしてサブシステム間の媒介となっている。一方、ルーマンの社会システム論の場合、専門的に（機能的に）細分化されたコミュニケーションシステムがサブシステムとなっており、そしてそれぞれのサブシステムには、コミュニケーションを媒介するメディアが存在する。権力、貨幣、真理、愛等が代表的なものだが、他にも複数取り上げられている。もっともパーソンズとルーマンにおける行為、コミュニケーションは、ハーバマスの唱えるコミュニケーション的行為・了解志向的行為ではなく、目的合理的行為・成果志向的行為であることは言うまでもない。従って、厳密にいえば、象徴的メディアというより、記号的メディアということになる。このような違いはあるが、最大公約数として社会におけるルールをメディアとして措定した場合、顔はこのようなメディアに含まれるとも言える。ただし、顔は貨幣や権力に比べて複合的であり、そして個別性と一般性とをあわせもっている。従ってその点では次元を異にするとも言える。権力や貨幣との関連も視野に入れて顔のメカニズムを研究していくことが、これからの課題となるように思われる。

社会の変動はメディアの盛衰をもたらすが、これからの社会変動によって顔はどうなっていくのだろうか。これまでの考察からも分かるように、今日における顔の性格は、伝統中国におけるそれと本質の面でそれほど変わらない。そもそも顔が重要な意味を持つのは、社会において共同体規範が弱く、しかも市場メカニズムが十分に機能していないことが大きな原因とも言える。この方向で考えると、中国において市場メカニズムが十分に浸透すれば、顔はメディアとしてはあまり機能しなくなる、ということになる。はたしてそうなるのだろうか。

確かに近代化の過程で顔の存在感を奪ったのは、市場経済化であり、そして大規模組織化ないし官僚制化である。さらにはギデンズのモダニティ論［ギデンズ,1993］にいう時間と空間の分離の進展がもたらす匿名関係の支配化も顔の無力化に帰結する。しかし、冒頭でも述べたように、もし顔が意味世界の重心であるとするならば、顔のない社会、匿名関係の支配する社会は、人間にとって望ましいものとはいえないだろう。現にそのような近代化の進展には歯止めがかかるようになってきたようにも思われる。今日社会資本として経営の効率化と結び付けられて論じられているネットワーク組織論も、そもそもは1970年代から顕著になった社会のネットワーク化への着目がはじまりである［若林,2009］。基本的に個々人が主体的に相手とコミュニケーションを取る形で形成される社会ネットワークの進展は、顔の復権、意味の復権として捉えられるべきであろう。

これまでも見てきたように、中国社会は積極的に欧米型市民社会へ向かおうとしていないように見受けられるが、それにはもちろんさまざまな原因があるだろう。ただ、一因としては、欧米においても従来の近代化にある程度歯止めがかかるようになったことも挙げられよう。市場経済化が進んでいるにもかかわ

らず、今日の中国は過去へ進化する社会主義［園田,2008a］であると診断する学者が現れていることも、このような文脈からすれば、その理解はそれほど難しくない。

このような状況を考えた場合、中国における顔の再生産は今後も続くことが予想される。前でも示唆されているように、顔の存在感は市場化と近代的官僚制化に反比例する。また視点を少し変えた場合、個人主義と集団主義の度合いとも逆相関関係にあると言える。冒頭で触れたA.H.スミスの指摘する19世紀中国社会の顔的特徴は、市場メカニズムや近代的官僚制、個人主義の「未発達」によるものであり、また集団主義の脆弱性によるものであるとも言える。ここで言う集団主義とは具体的には、生活空間を構成する所属集団の共同体的性格のことであるが、その脆弱性については多くの研究者が指摘しているところである[21]。共産党政権樹立後、社会主義体制の確立とともにこのような局面は多少変化することとなる。建国初期においては、ある程度の近代的な制度の導入と共産主義的共同体意識の高揚により、顔によって結ばれる関係とは違う「同志」関係が重視されることもあったが［孫立平,1996］、その後の一党独裁の強化、全体主義の進展により疎外化が進み、非人格的なルールと集団への帰属意識は影を潜め、顔による個人的ネットワークが重視されるようになった。これはまさに社会主義体制における顔の再生産過程と言えよう。そして改革開放がスタートし、市場経済化が進展するにつれて顔的関係としての人格的関係が弱体化する局面も見られたりするが、しかし「社会主義市場経済」という体制に内在する矛盾により、顔は体制に適応する形で再生産されている。さらに、市場経済化が一段と進展して「社会主義」という限定語が外され、「市場経済」体制になったとしても、そこには人間疎外による顔の要請が待ち構えているということは、前述通りである。このように、顔は新しい環境に適応する形で絶えず再生産されると見るべきであろう。従って、当然ながら顔論的アプローチも更なる進展が期待されるのである[22]。

[1]筆者も2008年複数の中国人研究者に同様の質問をしたことがあるが、大体同じような答えだった。

[2]『広州日報』（2010.3.15）によれば、2010年３月５日の全人代第十一期第三回会議で行われた温家宝首相の政府活動報告には「灰色収入」の表現があったが、その後の審議において定義が難しいとの理由で削除されることとなった。

[3]2008年度の推計値。『北京晩報』（2010.8.12）参照。

[4]オックスフォード英英辞典には“to save one’s face”の表現が中国の影響によると記されている。また日本語では中国語からの外来語であるメンツが使用されている。

[5]陳新峰による翻訳本（『中国人的徳性』金城出版社、2005年）参照。なお、スミスによる*Village Life in China:a Study in Sociology*（1899）も関連文献として挙げられる。

[6]この点については、筆者［1998］参照。

[7]この方法論は中国社会に限らず、社会一般の分析への適用も目指されている。

[8]これに関し坂部［2009］は「〈おも‐て〉の『おも』は、重（おも）に通じるとともに、また、〈おもふ〉＝思ふの思（おも）にも通じる。〈おも‐て〉によって方向づけられかたどられるコスモスは、同時に、はじめて、ひとの〈思ひ〉をかたどり定着する。〈おも‐て〉＝面＝顔（おもて）とは、まさに、〈思ひ〉のかたどられる場所にほかならない。顔（おもて）とは、意味づけられたわたしたちの世界の〈おも‐て〉〈重て〉〈重心〉である」［p.14］と述べ、「おもて（面）」が、やまと言葉系において「思」と「重」に通じることを一つの論拠として提示するが、これは本人も示唆している［p.23］ように、参考的位置づけになっていると思われる。

[9]坂部が直接批判の対象にしているのは近代的自我であり、筆者のそれは形式合理性の支配による管理社会であるという点で違いはあるが、しかしこの二つは深層においてつながっているということは言うまでもない。

[10]これについては、坂部の次のような自説に対する説明からも窺い知ることができる。坂部は自らの「おもて」論との関連で、「最初から他者を排除した形での、私は私である、という形」での「アイデンティフィケーション」を排し［坂部恵・山崎賞選考委員会,1978,p.210］、「他者の中に自らをもう一度見出していく。もう一度と言うか、初めてと言うか、これは分かりませんけれども、とにかく他者という回路を通して自己のアイデンティティを見出す」必要がある［同p.157］という認識を示すが、その具体像については、「もう少し流動的なアイデンティフィケーション…、いろんなものに変身するけれども、おのずからそこに枠が決まっているというか、開いた動的な形でのアイデンティティ」［同pp.210-11］という表現にとどまり、さらにそれについても「下手をすると間柄に埋没してしまい、…アイデンティティも主体も何もなくなっちゃうという、そういう落とし穴がいつも待ち構えている発想だと思うんで、だからその辺をどういうふうに考えていったらいいかということが、私自身実はよく分からない」［同p.211］と不安を述べている。

[11]ここにおける互酬、再分配、交換に関する議論はポランニー［1975;1980］に基づいている。

[12] 同情（漢字表現の場合）は自然な感情の発露という側面をもつが、現実の社会生活においては、（示されるべき）態度として捉えられ、同時にその延長線上の行動が期待される傾向も強いように思われる。そして（同一次元における）「優位」者から「劣位」者へという方向性も社会通念として存在すると言えよう。同情のこのような側面は社会規範と親和性をもつと言える。ここでは、この側面が強調されている（具体的には、「同情［する］に値する・しない」（中国語：「値得・不値得同情」）という慣用表現における同情も一例として挙げられる）。

[13]ちなみに安心（assurance）については、「相手が自分を搾取する意図をもっていないという期待の中で、相手の自己利益の評価に根差した部分」であると述べて区別している［山岸,1998,p.40］。

[14]档案とは人事管理の必要上設けられた、個人ファイルのことである。

[15]高級住宅区、富裕層向けと庶民向けに分離されている理髪店や診療所、富裕層の交際グループ、高額会員制のクラブ・会館、などが例として挙げられている。

[16]国営通信社新華社系の「経済参考報」（2010年５月10日）は、国家発展改革委員会の専門家の見解として、中国のジニ係数は2000年に0.4を超え、上昇しつづけていると伝えている。

[17]この階層の人たちは社会資本総量が貧弱な上、主に親戚、友人といった狭い範囲に頼ったことが原因として挙げられるとしている。

[18]大村［1997］によれば、世俗的欲望を抑えると同時に宗教的目標達成へ向けての世俗的行動を促すキリスト教の「禁欲のエートス」とは違って、日本の伝統的宗教はあらゆる欲望を鎮め、自然に溶解するという指向をもつ「鎮欲のエートス」を有する。しかし、明治期からの近代化により、世俗的目標が重視されるようになり、その結果中間層の支配する社会構造が形成され、上層（勝者）への不満と下層（敗者）への不安とを抱える中間層の「禁欲的頑張る主義」が支配的な倫理箇条となる。ここに「禁欲的エートス」の世俗化版としての「煽る文化」が形成されるというわけだが、中国社会における名声的アイデンティティ追求もこのような文化装置によるものと思われる。但し中間層が厚いとは言えない中国社会の場合、「煽る文化」の根源は中間層ないし経済的指標によるもの以外にも求められなければならない。

[19]筆者はかつて顔との関連で、世俗的生活空間を分析的に、手段的行為を中心とした利的世界、主として使命感や義務感による関係指向的行為を中心とした義的世界、自己確認、自己実現を指向する行為を中心

とした名的世界などに分けて考える試みを行ったことがある［李明伍,1998］。ここではそれに基づいている。

[20]このような捉え方は社会学に顕著と言える。大澤の紹介（大澤真幸「メディア論」［廣松渉ほか編『岩波　哲学・思想事典』岩波書店、1998］）参照。

[21]これについては筆者［1997b;1998］参照。

[22]本稿では、顔論的アプローチと関連づけながらこれまでの文化論的社会研究に対して分析を行い、そしてそれを通して制度論的アプローチや階層論的アプローチの限界を浮き彫りにすると同時に、顔論的アプローチの体系化の方向性（利的世界、義的世界、名的世界それぞれへのアプローチの有機的統合という方向性）をある程度示すことができた。このような体系化の視角と、（ポストオリエンタリズムないしポストコロニアリズム的影響を受けた多くの中国社会論が無意識的に欧米を準拠点としているような状況への批判に立脚する）中立的比較という方法論とが筆者の構想する顔論的アプローチの重要な特色として指摘できるが、その展開は本稿の範囲を超えるので、ここでは以上の指摘にとどめたい。

【参考文献】

バーガー、P.L.・.バーガー、B.・ケルナー、H.（1977）『故郷の喪失者たち－近代化と日常意識』高山真知子・馬場伸也・馬場恭子訳、新曜社

Bian Yianjie（1997）"Bringing strong ties back in:Indirect ties,network bridges, and job searches in China." *American Sociological Review* 62:266-285.

陳柏峰（2009）「村庄生活中的面子及其三層結構－贛南版石鎮調査」（広東省社会科学院『広東社会科学』2009年第１期、168-173）

陳介玄・高承恕（1991）「台湾企業運作的社会秩序：人情関係与法律」（東海大学『東海学報』32巻、219-232）

陳其南（2006）「中国人的家族与企業経営」（文崇一・蕭新煌主編『中国人：観念与行為』鳳凰出版伝媒集団江蘇教育出版社）

陳捷・盧春龍（2009）「共通性社会資本与特定性社会資本－社会資本与中国的城市基層治理」（中国社会科学院社会学研究所『社会学研究』第６期、87-103）

張文宏（2006）『中国城市的階層結構与社会網絡』上海人民出版社

張文宏（2008a）「社会網絡与社会資本研究」（中国社会科学院社会学研究所編『中国社会学年鑑－2003～2006』社会科学文献出版社）

張文宏（2008b）「社会転型過程中社会網絡資本的変遷」（上海大学『社会』第３期、73-80）

趙延東（2006）「再就業中社会資本的使用－以武漢市下崗職工為例」（学習与探索雑誌社『学習与探索』第２期）

趙延東（2008）「社会網絡与城郷居民的身心健康」（上海大学『社会』第５期、１-19）

張建新・Bond,M.（1993）「指向具体人物対象的人際信任：跨文化比較及其認知模型」（中国心理学会・中国科学院心理研究所『心理学報』第２期）

Colman,J.S.（2004）『社会理論の基礎　上』久慈利武監訳、青木書店

Colman,J.S.（2006）『社会理論の基礎　下』久慈利武監訳、青木書店

Erickson,Erik H.（1963）Childhood and Society, 2 d ed.,New York:Norton.

Fried,Morton H.（1953）Fabric of Chinese Sociaty,New York:Praeger.
フクヤマ、F.（1996）『「信」なくば立たず』加藤寛訳、三笠書房
フクヤマ、F.（2000）『「大崩壊」の時代（上）』鈴木主税訳、早川書房
ギデンズ、A.（1993）『近代とはいかなる時代か？－モダニティの帰結』松尾精文・小幡正敏訳、而立書房
Granovetter,Mark S.（1982）“The Strength of Weak Ties:A Network Theory Revisited.”Marsden,Peter and Lin,Nan,*Social structure and Network Analysis*,Sage,105-130.
グラノヴェター、M.S.（2006）「弱い紐帯の強さ」［大岡栄美訳］（野沢慎司編・監訳『リーディングスネットワーク論－家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房）
旗田巍（1973）『中国村落と共同体理論』岩波書店
Ho, D.Y.F.（1976）“On the Concept of Face”,*American Journal of Sociology*,81,867-883.
彭泗清（1999）「信任的建立機制－関係運作与法制手段」（中国社会科学院社会学研究所『社会学研究』第２期、53-66.）
池上英子（2000）『名誉と順応－サムライ精神の歴史社会学』森本醇訳、ＮＴＴ出版
Jacobs,B.J.（1979）“A Preliminary Model of Particularistic Ties in Chinese Political Alliances:Kan-ching and Kuan-hsi in a Rural Taiwanese Township”*China Quarterly*,78:237-73.
Jacobs,B.J.（1980）“The concept of Guanxi and Local Politics in a Rural Chinese Cultural Setting”,In Greenblatt,S.L.,Wilson,R.W.,& Wilson A.A.（Eds.）,Social *Interaction in Chinese Society*,pp.209-236,New York:Praeger.
ジェームズ・マン（2007）『危険な幻想』渡辺昭夫訳、PHP研究所
加々美光行（2007）「現代中国学原論」（愛知大学『中国の発見－中国学方法論のパラダイム転換』愛知大学国際中国学研究センター）
何友暉・陳淑娟・趙志裕（1991）「関係取向：為中国社会心理方法論求答案」（楊国枢・黄光国主編『中国人的心理与行為』桂冠図書公司）
King,Y.C. & Myers,J.T.,（1977）*Shame as an Incomplete Concept of Chinese Culture:A Study of Face*. Hong Kong:Social Research Center,Chinese University of Hong Kong.
金耀基（1988a）「人際関係中人情之分析」（楊国枢主編『中国人的心理』桂冠図書公司）
金耀基（1988b）「『面』、『恥』与中国人行為之分析」」（楊国枢主編『中国人的心理』桂冠図書公司）
胡先縉（2004）「中国人的面子観」（黄光国編著『面子－中国人的権力遊戯』中国人民大学出版社）
黄光国（2004）「華人社会中的臉面与溝通行動」（黄光国編著『面子－中国人的権力遊戯』中国人民大学出版社）
黄光国（2005）「華人社会中的臉面観」（楊国枢、黄光国、楊中芳主編『華人本土心理学（上）』,遠流出版有限公司）
喬健（1988）「関係芻議」（楊国枢主編『中国人的心理』桂冠図書公司）
Lee,T.V.（Ed.）（1997）*Contract,Guanxi,and Dispute Resolution in China*,New York:Garland Publishing,Inc.
Levi,Margaret（1996）“Social and Unsocial Capital.”*Politics and Society*,Vol.24.
Luhmann,N.（1990）『信頼－社会的な複雑性の縮減のメカニズム』大庭健・正村俊之訳、勁草書房
ナン・リン（2008）『ソーシャル・キャピタル－社会構造と行為の理論』筒井淳也他訳、ミネルヴァ

野沢慎司編・監訳（2006）『リーディングス　ネットワーク論－家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房
王飛雪・山岸俊男（1999）「信任的中、日、美比較研究」（中国社会科学院社会学研究所『社会学研究』第２期、67-82）
大村英昭（1993）「日本型家族の問題性」（濱口惠俊編著『日本型モデルとは何か－国際化時代におけるメリットとデメリット』新曜社）
大村英昭（1997）『日本人の心の習慣－鎮めの文化論』日本放送出版協会
王紹光・劉欣（2002）「信任的基礎：一種理性的解釈」（中国社会科学院社会学研究所『社会学研究』第３期、23-39）
ポランニー、K.（1975）『大転換』吉沢英成他訳、東洋経済新報社
ポランニー、K.（1980）『経済の人間Ⅰ・Ⅱ』玉野井芳郎他訳、岩波書店
羅家徳（2005）『社会網分析講義』社会科学文献出版社
羅家徳（2008）「社会網絡和社会資本」（李培林・李強・馬戎主編『社会学与中国社会』社会科学文献出版社）
羅家徳・張佳音（2007）「強、弱之分適用於中国人的関係嗎？－以組織内交換関係為例」（中国管理学会2007年大会［11月20日～22日、南京］）
羅家徳・周超文・張佳音（2009）『中国人不同関係的信任程度』（邴正主編『改革開放与中国社会学：中国社会学会学術年会獲奨論文集』社会科学文献出版社）
李偉民・梁玉成（2002）「特殊信任与普遍信任－中国人信任的結構与特徴」（中国社会科学院社会学研究所『社会学研究』2002年第３期、11-22）
陸学芸主編（2002）『当代中国社会階層研究報告』社会科学文献出版社
陸学芸主編（2004）『当代中国社会流動』社会科学文献出版社
李強（2008）「社会分層」（李培林・李強・馬戎主編『社会学与中国社会』社会科学文献出版社）
李明伍（1997a）「公共性的一般類型及其若干伝統模型」（中国社会科学院社会学研究所『社会学研究』第４期、108-116）
李明伍（1997b）「『人情』的交換行為の分析」（『文教大学文学部紀要』11-1、51-73）
李明伍（1998）「中国社会における顔の位相」（日中社会学会『日中社会学研究』第６号、97-119）
李明伍（2001）『現代中国の支配と官僚制－体制変容の文化的ダイナミックス』有信堂.
李明伍（2005）「『顔社会』における公共性の現れ方－中国社会の公共性序論」（日中社会学会『日中社会学研究』第13号）
李明伍（2009）「中国社会への『顔』論的アプローチの意義と課題－『顔』の比較社会学に向けて」（日中社会学会2009年度大会、名古屋大学、６月６ － ７日）
林語堂（1992）『わが中国論抄』鋤柄治郎訳、黄河
梁漱溟（1935）『中国文化要義』北京：商務印書館
劉軍（2006）『法村社会支持網絡－　一個整体研究的視角』社会科学文献出版社
劉林平（2006）「企業的社会資本：概念反思和測量途徑－兼評辺燕傑、丘海雄的〈企業的社会資本及其効果〉」（中国社会科学院社会学研究所『社会学研究』第２期）
坂部恵（2009）『仮面の解釈学』（新装版）東京大学出版会
坂部恵・山崎賞選考委員会（1978）『仮面の時代』河出書房新社

Seligman,A.B.（1997）The Problem of Trust,Princeton University Press.
首藤明和（2003）『中国の人治社会－もうひとつの文明として』日本経済評論社
孫立平（1996）「『関係』、社会関係与社会結構」（中国社会科学院社会学研究所『社会学研究』第５期）
孫立平（2004）『失衡－断裂社会的運作邏輯』社会科学文献出版社
孫立平（2006）「断裂：20世紀90年代以来中国社会的分層結構」（李友梅他編『当代中国社会分層－理論与実証』社会科学文献出版社）
園田茂人（1988）「中国的〈関係主義〉に関する基礎的考察」（ソシオロゴス編集委員会『ソシオロゴス』14、54-67）
園田茂人（2001）「中国の階層研究－今後の比較研究のために」（園田茂人編著『現代中国の階層変動』中央大学出版部）
園田茂人（2005）「職業評価の社会力学－日中比較からの知見」（園田茂人編著『東アジアの階層比較』中央大学出版部）
園田茂人（2008a）『不平等国家　中国－自己否定した社会主義のゆくえ』中央公論新社
園田茂人（2008b）『中国社会はどこへ行くか－中国人社会学者の発言』岩波書店
曽鵬（2008）『社区網絡与集体行動』社会科学文献出版社
朱瑞玲（2006）「中国人的社会互動－論面子的問題」（楊国枢主編『中国人的心理』江蘇教育出版社）
鄭暁明（2003）『異文化圏社会規範層次結構模型的比較研究』経済科学出版社
鄭也夫（2006）『信任論』中国広播電視出版社
翟学偉（1993）「中国人際関係的特質－本土的概念及其模式」（中国社会科学院社会学研究所『社会学研究』第４期）
翟学偉（1995）『中国人的臉面観』桂冠図書公司
翟学偉（2000）『中国人行動的邏輯』八方文化企業公司
翟学偉（2003）「社会流動与関係信任－也談関係強度与農民工的求職策略」（中国社会科学院社会学研究所『社会学研究』第１期）
翟学偉（2004）「人情、面子与権力的再生産－情理社会中的社会交換方式」（ 中国社会科学院社会学研究所『社会学研究』第５期、48-57）
翟学偉（2005a）『中国社会中的日常権威－関係与権力的歴史社会学研究』社会科学文献出版社
翟学偉（2005b）「個人地位：一個概念及其分析框架」（中国社会科学院社会学研究所編『中国社会学　第四巻』上海人民出版社）
涂駿（2009）「論差序格局」（広東省社会科学院『広東社会科学』第６期、165-170）
唐有才・符平（2009）「転型期社会信任的影響機制－市場化、個人資本与社会交往因素探討」（中国人民大学『社会学』第１期、77-85）
若林 直樹（2009）『ネットワーク組織－社会ネットワーク論からの新たな組織像』有斐閣
Weber,M.（1971）『儒教と道教』木全徳雄訳、創文社
Whitley,R.D.（1991）The Social Construction of Business Systems in East Asia,*Organization Studies*,12（１）:pp. 1 -28.
山岸俊男（1998）『信頼の構造－こころと社会の進化ゲーム』東京大学出版会
Yang,Mayfair（1994）*Gifts,Favors,and Banquets:The Art of Social Relationships in China*,Ithaca,N.Y.:Cornell University Press.

楊中芳・彭泗清（1999）「中国人人際信任的概念化：一個人際関係的観点」（中国社会科学院社会学研究所『社会学研究』第２期、１-21）
楊宜音（1999）「『自己人』－信任建構過程的個案研究」（中国社会科学院社会学研究所『社会学研究』第２期、38-52）

李　明伍（和洋女子大学人間・社会学系准教授）

（2010年９月27日受付　2010年11月16日受理）